

袋井市長者平遺跡

(昭和62年度国庫補助事業)
(発掘調査報告書)

1988. 3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和62年12月1日～昭和63年3月31日の期間に、袋井市豊沢地内で実施した長者平（ちょうじゃびら）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長者平遺跡内での茶園改植に伴い、岡及び静岡県からの補助金を得て袋井市教育委員会が実施した。
3. 長者平遺跡でいままでに行われた発掘調査は次のとおりである。

調 査	年 度	発 掘 担 当 者	出 土 遺 構・遺 物
第Ⅰ次調査	昭和53年度	吉岡伸夫	住居跡・古墳・土器・石器
第Ⅱ次調査	昭和54年度	吉岡伸夫	住居跡・古墳・土器・石器
第Ⅲ次調査	昭和55年度	吉岡伸夫・永井義博	住居跡・古墳・土器・石器
第Ⅳ次調査	昭和56年度	永井義博	住居跡・古墳・土器・石器
第Ⅴ次調査	昭和58年度	吉岡伸夫	住居跡・古墳・集石・石器
第Ⅵ次調査	昭和60年度	吉岡伸夫・永井義博	住居跡・土墳・土器・石器
第Ⅶ次調査	昭和61年度	吉岡伸夫	集石・土壇・土器・石器
第Ⅷ次調査	昭和62年度	永井義博	住居跡・炉跡・土器・石器

4. 発掘調査は永井義博（袋井市教育委員会）を発掘担当者として、静岡県教育委員文化課の指導を得て行われた。
5. 本報告書の執筆・編集は永井義博が担当した。
6. 本報告書に使用した挿図のトレースは早川保子が作図し、出土遺物の整理には山下悦子、寺田矩江、早川明子の協力を得た。
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管した。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過.....	1
第2章 調査の経過.....	1
第3章 調査体制.....	2
第4章 調査の方法.....	2
第5章 地理的環境・歴史的環境.....	3
第6章 遺構.....	4

挿 図 目 次

- 第1図 長者平遺跡位置図 (1/50,000)
- 第2図 長者平遺跡の発掘調査地点 (1/2,000)
- 第3図 発掘調査全体図
- 第4図 住居跡015実測図
- 第5図 住居跡012実測図
- 第6図 住居跡050実測図
- 第7図 住居跡050内が跡実測図
- 第8図 土壇052実測図
- 第9図 遺構実測図(土壇001、006、010)
- 第10図 遺構実測図(土壇040、053、054)

図 版 目 次

- 図版 1 (A) 長者平遺跡全景 (南より)
(B) 長者平遺跡近景 (北より)
- 図版 2 (A) 昭和62年度 南区発掘風景
(B) 昭和62年度 南区完掘写真
- 図版 3 (A) 住居跡 015 柱穴の発掘風景
(B) 住居跡 015 完掘写真
- 図版 4 (A) 住居跡 015 炉跡付近遺物出土状況
(B) 住居跡 015 炉跡の掘り方
- 図版 5 (A) 住居跡 012の炉跡付近
(B) 土壌 010 完掘写真
- 図版 6 (A) 土壌 005・067 完掘写真 (北より)
(B) 土壌 008 完掘写真
- 図版 7 (A) 土壌 001 完掘写真 (北より)
(B) 土壌 002 完掘写真 (北より)
- 図版 8 (A) 古墳の周溝 007 完掘写真 (北より)
(B) 溝跡 021 完掘写真 (東より)
- 図版 9 (A) 昭和62年度 北区発掘風景
(B) 昭和62年度 北区完掘写真
- 図版10 (A) 土壌 052 完掘写真 (北より)
(B) 土壌 040他 完掘写真 (東より)
- 図版11 (A) 住居跡 050 床・遺物出土写真 (南より)
(B) 古墳の周溝 025 完掘写真 (北より)

第1章 発掘調査に至る経過

袋井市は県内でも有数の茶産地であるが、近年のお茶の高品質化に伴い在来種の茶から「やぶきた茶」への転換が図られてきた。市内では、県営のパイロット事業や農家の共同による大規模な茶園改植事業から、個人の茶園改植まで大小の開発が盛んである。

さて、袋井市の遺跡地図を広げると、縄文時代の集落跡や古墳時代の後期群集墳のほとんどが市内各地の茶園の中に収まってしまうほどである。そのため、改植時には地元民より「刀や壺がたくさん出た。」との話をよく耳にする。大規模開発に関しては、事前に通知され茶園内の遺跡や古墳等の保存処置がとられることもあるが、個人の改植に対してはこれといった規制もなく、なし崩し的に破壊されていってしまうのが現状である。

しかし、ここ袋井市豊沢地区では、埋蔵文化財に対する理解が深く、特に縄文時代中期の集落跡として有名な長者平遺跡では昭和53年から茶園改植には、必ず国県補助金を得て発掘調査を行い記録保存につとめている。

第2章 調査経過

- 11月21日 現場作業用プレハブ小屋、仮設トイレの建設。
- 11月22日～30日 レベルの移動。グリッドポイントの確認。器材の搬入。
周辺の地主さんへのあいさつ。
- 12月1日 調査開始日。調査区の設定。表土はぎ開始。
- 12月2日 南区から発掘を始める。耕作土より土器・石器等の出土。
- 12月5日 作業員の人数も揃ってきたので本格的に掘り始める。茶の木の根の影響も比較的少なく、遺構もはっきり確認できる。
- 12月8日 浅い層位で古墳の周溝が検出された。上部は削平され、底部のみ数センチメートル残る。出土遺物はほとんどない。
- 12月11日 住居跡・集石遺構などが確認されてきた。焼土も2ヶ所で検出されている。
- 12月12日 南区完掘写真撮影。
- 12月14日 遺構の平面実測と作業員による排土の移動。
- 12月17日 北区の発掘を開始する。
- 12月19日 表土の除去が終わり包含層に到達する。遺物の出土量が多くなってる。
- 12月21日 住居跡・集石遺構などが確認されてきた。古墳の周溝も検出。
- 12月23日 ビット・溝などの精査。
- 12月25日 北区完掘写真撮影。群衆、遺物等は取り上げていない。
- 1月19日～28日 最終面の平面実測。レベルの計測。住居跡 050のダム押し。
- 1月29日 重機により埋め戻し。石の運び出し。
- 1月30日 現地調査完全終了。器材等の完全撤去。

第3章 調査体制

●調査指導 静岡県教育委員会 文化課

●調査主体 袋井市教育委員会 教 育 長 鈴 木 勲 一

社会教育課長 井 口 育 夫

文化振興係長 小 粥 保 夫

主任学芸員 吉 岡 伸 夫

主 事 建 部 千代子

学 芸 員 永 井 義 博（調査担当者）

●調査参加者 佐藤好孝 三浦久雄 高橋秋義 安間しげ子 榎松光子 寺田炬江 寺田
松江 高橋さかえ 高橋巳代子 永田のぶ枝 仲根世始子 名倉保子 早川里美 早川保
子 山下悦子 早川明子

第4章 調査方法

長者平遺跡は昭和53年度から発掘調査は開始されたが、遺跡全体を覆うグリットの設定及び基本原点はかなり遅れて設定された。それまでは、各年度ごとに木製の基本杭の設置がなされたこともあったが茶園の耕作などで基本杭は埋没したり、または朽ち果てたりしていた。いままでの長者平遺跡の調査報告によると、今回の調査地区はグリット設定図のなかで、遺跡のほぼ中央で昭和60年度の発掘調査区の東側の約300㎡の茶園のグリットと名ではI-8、J-8、K-8、L-8にあたる。今回の調査でもこの基本グリットを使用するつもりで周囲の畑で過去に設定された測量杭を探してみた。しかし、その結果4本の杭の位置を確認することができたが、東西南北の直線上に並ぶ複数の測量杭は発見できなかった。しかし、遺跡の調査の始まる時期がせまってきたため調査区内に第3図のとおり新たにグリットを設定した。出土遺物の取り上げ・実測図の整理・現像されたフィルムの分類などすべてこの名称に統一して行った。遺構名は発見順に通し番号で001、002、003と名付けていった。

発掘調査は、調査区内を南北に2分割して、その南区を昭和62年12月1日から12月24日まで、北区を昭和63年1月6日から1月20日の期間調査した。セクションベルトは、調査区内で茶園の改植が進んでいるため今回の調査では設定しないで発掘区周囲の外壁でブライマリーな部分の実測をした。南区の発掘調査ででた排土は作業員が1輪車で北区に運んで積上げ、調査終了後ふたたび作業員により南区に戻した。北区の排土も同じく作業員によって一輪車で南区に積上げ発掘調査した。南区に最後に積上げた土は地主さんへの茶園の引渡時期の関係で重機によって1日で埋め戻した。現場の写真撮影用のカメラは、アサヒペンタックス6×7（1台）とニコンFE（2台）を使用した。写真は、ローリングタワー3段または2段の上から撮影した。

第5章 地理的環境・歴史的環境

小笠山の西北山麓は大きく広がる開折谷が西に向って伸び、原野谷川が流路を大きく変える変換点を形成する要因となっている。袋井市内の支流河川は2つのタイプがあり、ひとつは後背湿地の水を集める小笠川・蟹田川・弁財天川などで、もうひとつは丘陵地の水を集める中沢川・馬込川・小笠沢川・法多沢川・三沢川などである。このうち小笠沢川をはじめとする小笠山丘陵を流れる河川は砂礫質の谷底平野を流れるために伏流水となり、ふだんは川に水の流れは見られないのが特色となっている。しかし山裾には数ヶ所湧水があり、人間が生活するための水に困るということはないのである。

長者平遺跡はこのように広がる丘陵上のゆるやかな南斜面に広がる縄文時代中期頃から始まる人集落である。この地域で最初の文化の出現がこの長者平遺跡で竪穴住居跡、土壇群から縄文時代後期後半の土器を出土している。このように当遺跡は縄文遺跡として著名であるがこれは遺跡内に広い茶園を所有しておられた故早川二氏の採集資料のおかげでもある。早川氏は農作業のおり出土する土器片、石器等を丹念に拾い集められ、その量はミカン箱に3杯もあった。この採集品は石鏃、石錐、石斧、縄文土器などや、直刀、勾玉、金環などの古墳出土品など多種・多彩でいる。これらの採集資料は地元研究者のみならず樋口清之、岡本勇氏等の知るところとなり国学院大学の学生諸君をはじめ多くの人々の知るところとなった。その後、昭和53～61年にかけて7次にわたって袋井市教育委員会により発掘調査されている。周辺の縄文時代遺跡には山本遺跡がある。ここは長者平遺跡の下を流れる小笠沢川上流の丘陵南面の茶畑である。表層遺物としては石鏃、石匙、石錐がある。

弥生時代の遺跡は本地域（小笠沢川上、中流域）においてはまだ発見されていない。弥生時代遺跡群の中心は原野谷川に面した丘陵・微高地・自然堤防上に愛野山遺跡、地藏ヶ谷遺跡・掛の上遺跡、大門Ⅰ～Ⅲ遺跡が散在しており河川との関連を示している。

古墳時代に入ると総数200基をこえる高塚墳と、60基を数える横穴が中心となって丘陵各地は一大古墳群となっている。これらのうち、地藏ヶ谷古墳群・金山古墳群・壺座古墳群は木棺墓を主体としており副葬品は比較的少ないのが特徴で5世紀後半から6世紀中頃に掛けて築造されたと考えられている。6世紀中頃には、鏡・馬具等を含む多量の遺物を出土する大門大塚古墳が丘陵上に現われてくるが、その他の古墳では現在までのところ質・量とも乏しい内容となっている。集落跡として調査されたものは調査範囲が広いためその全容をつかむに至っていないが、掛の上遺跡・大門Ⅰ遺跡・三門遺跡等が確認されている。6世紀中頃以降になると、古墳群の築造と並行して横穴墓が隆盛となる。地藏ヶ谷横穴墓群が著名であるが、これらは古墳と墓域を同一、または近接する位置にある。横穴式石室を内部主体とする小笠沢川流域の長者平古墳群・駒ヶ谷古墳群・山本山古墳群等が築造を開始するものもこの時期である。長者平古墳群は丘陵南斜面を中心に東西700m、総数50基からなり、丹生神社境内と長者平遺跡北側の2基の前方後円墳を中心に直径10～20mの円墳群より構成されている。

第 6 章 遺 構

今回の調査は、長者半遺跡の所在する丘陵上の約300㎡の茶園の改植予定地が対象である。ここは、昭和53年度より調査されている発掘区画のほぼ中央にあたり、縄文時代中期から古墳時代にかけての遺構・遺物が予想されている。

基本的な層位は次のとおりである。

層 位	土 層 名	土 層 の 特 徴
第Ⅰ層	暗褐色土層	厚さ20cm～25cmで、縄文時代中期から古墳時代・中世近世の遺物を混在する。茶園の耕作土となっている。
第Ⅱ層	黒色泥質土層	厚さ5cm～15cmで、丘陵南面では厚く堆積しており縄文時代・古墳時代・中世の遺物が混在している。
第Ⅲa層	暗褐色砂礫混り層	厚さ5cm～15cmの縄文時代の包含層である。
第Ⅲb層	黄褐色砂礫混り層	厚さ5cm未満で、第Ⅲa層から遺跡基盤層にかけてゆっくりとした変化を示す。砂礫の割合は第Ⅲa層に比べて少ない。相対的に多くの縄文時代の遺物を包蔵する。第Ⅲa層とともに長者半遺跡を代表する縄文時代の遺物包含層である。
第Ⅳ層	黄褐色土層	遺跡基盤層。小笠山礫層。無遺物層である。

縄文時代の遺構は、住居跡、またはそれに類似する遺構が3軒検出されている。また、不定形の上壊やピットは多数検出されているが、本年度は集石を持つ遺構（土構）が多いようである。しかし、この地区も遺構の確認面のレベルはかなり下で、住居跡・ピット・土壊の壁の残存状況はあまり良好ではない。とくに住居跡は、焼土・炉石跡等が検出されてはじめてその存在が確認できるほどである。

住居跡 015

挿図の第4図および写真図版3の(A)(B)、写真図版4の(A)(B)を参照されたい。遺構は南区の東側に位置し、住居跡の西側半分が検出された。遺構確認面のレベルが低いために壁の立ち上がりは不明瞭であるが壁溝によりその規模は確認できる。壁溝は南端の一部が失われているが、幅20cm～16cm、深さ10cm～9cmを計る。柱穴は、壁溝と切り合う形で検出されたピットがほぼ等間隔にまわるところから住居跡に伴う遺構と考えられる。規模は、径40cm～20cm、深さ10cm～20cmである。炉跡は、遺構の全容が確認されていないためはっきりしたことはいえないが、住居跡内のやや西寄りに位置している。炉を作るにあたっては浅い皿状の上壊を掘り、その中に石を並べて裏込めの土（第4図の断面図の土層NO1）を込めたと考えられる。炉石は検出された段階で3個残っている。この図で、スクリーントーンの入った部分は、炭化物・焼土を多量に含む土で炉内の土と思われる。炉の掘り方は、東西1.04m、南北90cm、深さ12cmである。炉石は、長軸24cm、短軸9cmの石で赤く焼けている。炉跡の南東方向には、大きくぼみ石の破片が裏返し

に置かれている。住居跡の床面上には、礫群、土器片が散在している。

住居跡 012

挿図の第5図、写真図版5の(A)を参照されたい。この住居跡は当初南区の発掘調査では焼土とビットの組合せで屋外炉として検出されたい。しかし、つづいて北区の発掘が進むにつれて、岡面を繋ぎ合わせてみると楕円形ながら住居跡の形態をしめした。調査区のなかでもこの住居跡の位置する付近は小笠山の礫層が地表に露れているところで、遺構の平面プランの確認が難しく北側の一部と、南側付近しか住居の壁は確認できなかった。遺構の規模は、長軸4.20m、短軸3.40mである。また、その他の集石土壌もこの付近に集中して住居跡と重複している。

住居跡 050

挿図の第6図、写真図版11の(A)を参照されたい。この住居跡は北区の北東コーナーで遺構の4分の1が検出された。また、かつて今回の調査区の北側農道で行った発掘調査のトレンチ内でこの住居跡の中央部付近が検出されている。遺構確認の上面段階では、小礫が一面に散布していたため遺構についてははっきり確認できなかった。これを取り除き下面に調査が移ると、二重にまわる壁溝と柱穴、焼土ブロックが検出された。このことから住居跡 015は2軒の住居の重複したもの、または建て替え、拡張されたものと思われるが遺構の一部しか調査されていないので詳細は不明である。このため、住居跡の規模(計測値)・形態についてはここでは言及することを避けた。

住居跡 015 内炉跡

挿図の第7図および写真図版5の(A)を参照されたい。住居跡 015と重複して検出されている。長軸70cm、短軸50cm、深さ28cmの小さなビットである。礫はにぎりこぶし大からタマゴぐらいの大きさのものまで巧く組み合わせてすり鉢形の炉を作っている。炉内の礫は赤く焼けている。遺構内より土師器質の上器細片が一片出土しているが時期を決定する遺物とは言えない。ここでは住居 015より新しいということのみ記述しておく。

土壌 052

挿図の第8図および写真図版10の(A)を参照されたい。第8図の実測図では、隣接する土壌と重複したままの状態に掲載してある。これは2つの遺構の境目がはっきりしないため、上面の礫群がどちらの遺構に伴うものか不明であるためである。土壌の規模は、東西2.60m、南北2.80m、深さ10cmである。

土壌 001

挿図の第9図および写真図版7の(A)を参照されたい。南区の南側で検出された遺構

でTピットの西側の3分の1である。このような状態であるため、遺構の規模（計測値）・形態についてはここで記述することは避ける。この手の類別としては昭和55年度の長者平遺跡発掘調査（丹生神社西側の寺田二郎氏の茶園改植に伴う）で検出されている。

土壌 006

挿図の第10図を参照されたい。南区の調査で住居跡 015の南側で検出された不定形の土壌である。規模は、東西1.10m、南北2.20m、深さ20cmである。土壌の主軸は北北東—南南西である。

土壌 010

挿図の第10図および写真図版5の（B）を参照されたい。長軸1.20m、短軸90cm、深さ20cmの埋葬土壌である。規模・形態・上層の堆積状態より遺骸を埋葬したのは確実であろう。断面観察の結果も、土壌の上に積んであった石が遺構内の空洞化に伴い陥没した状況を良好に示している。集石状況は密で、土壌の中心にはやや大きめの石を、周囲にやや小さい石が落ち込んでいる。

土壌 040

挿図の第10図を参照されたい。規模は、直径80cm、深さ20cmの浅くて、ほぼ円形の小さな土壌である。縁は浮いた状態で検出されている。

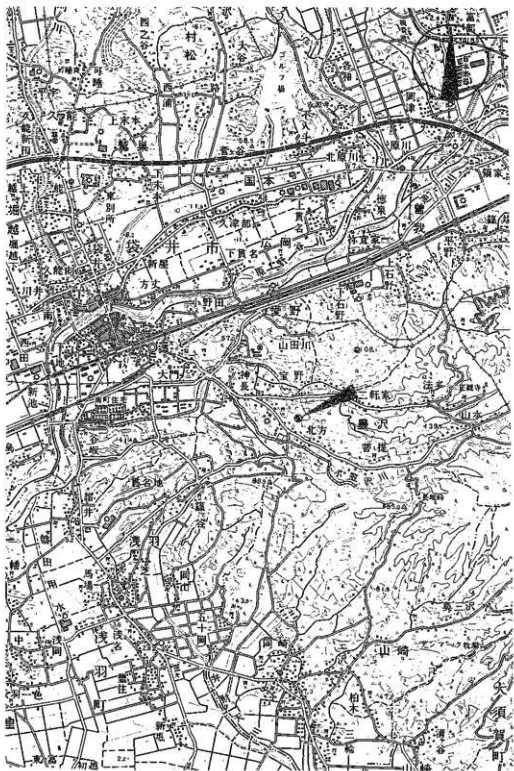
土壌 053・054

挿図第10図を参照されたい。2つの無花果形の土壌が重複して検出された。ともに疎な状況の集石を持ち、土壌 053は石が落ちこんだ状態で、土壌 054は浮いたままの状態で確認されている。規模は、土壌 053は長軸2.40m、短軸1.10m、深さ40cm、主軸は北東—南西、土壌 054は長軸1.93m、短軸80m、深さ50cm、主軸は北東—南西である。

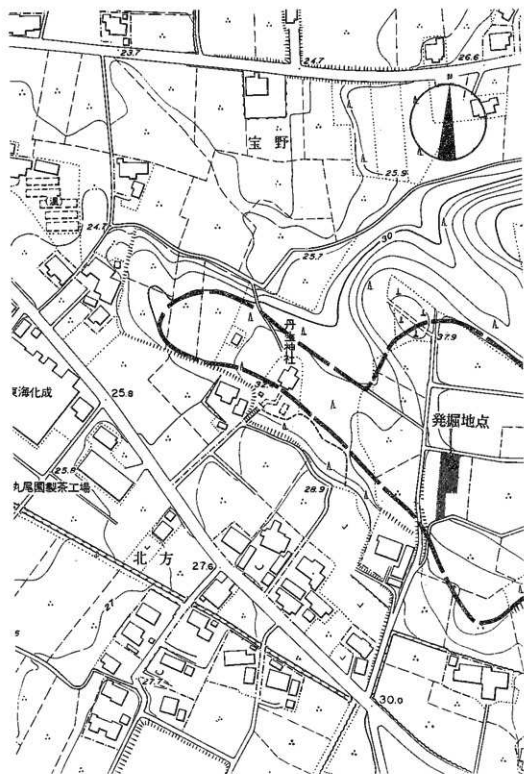
古墳時代の遺構としては、この付近一帯に分布する長者平古墳群の中の小さな円墳の周溝が2ヶ所検出された。この円墳は昭和60年度の発掘調査で主体部・周溝の一部が検出されている。しかし、茶園内のため遺構の上部は削平され、遺構としての残りは写真図版8の（A）や写真図版11の（B）のとおりあまり良好ではない。

插

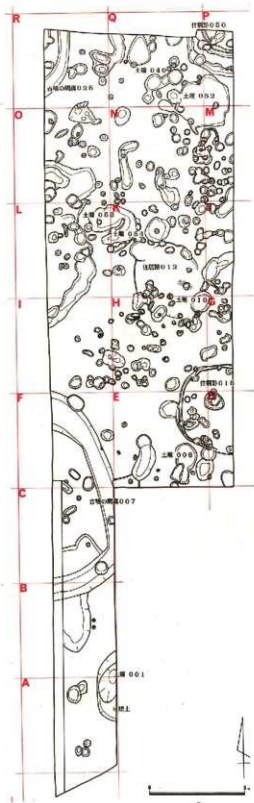
圖



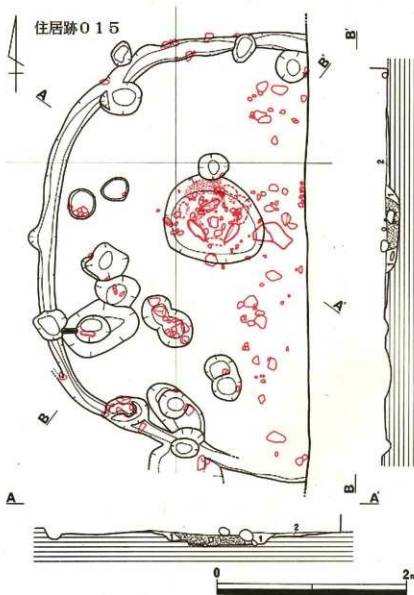
第1図 長名平遺跡位置図



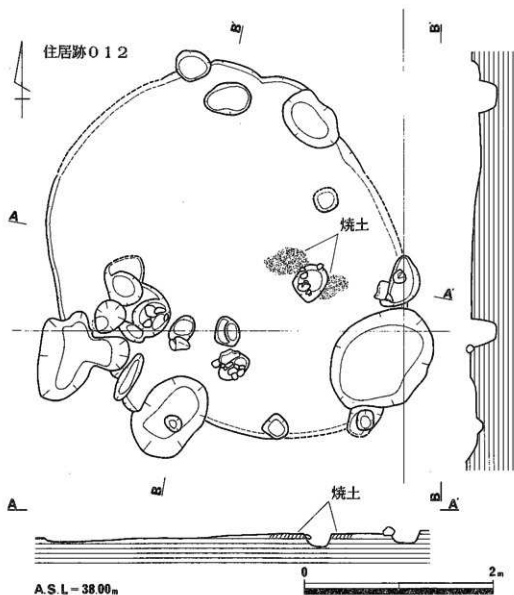
第2図 長者平遺跡の位置と範囲



第3図 発掘調査全体図

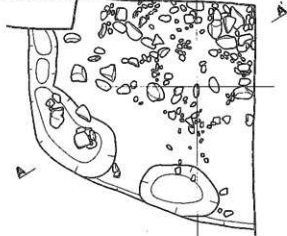


第4図 住居跡015実測図



第5图 住居跡012实测图

住居跡050上面

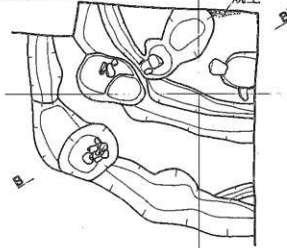


A



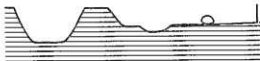
A'

住居跡050下面



焼土

B

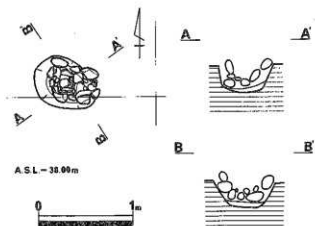


B'

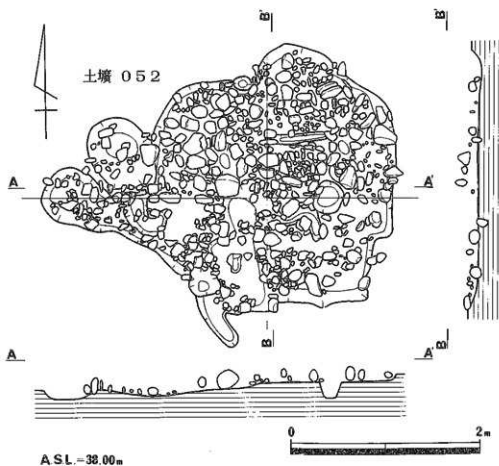
A.S.L = 38.00 m



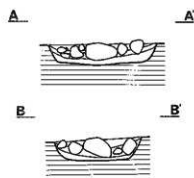
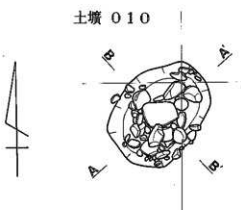
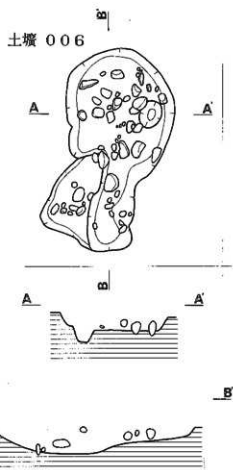
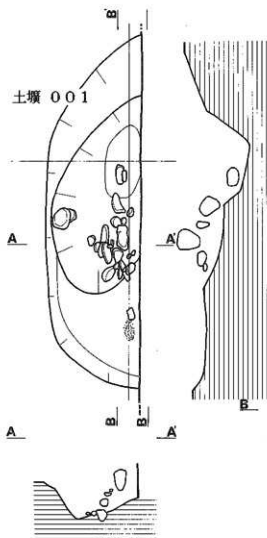
第6图 住居跡050实测图



第7図 住居跡050内炉跡実測図



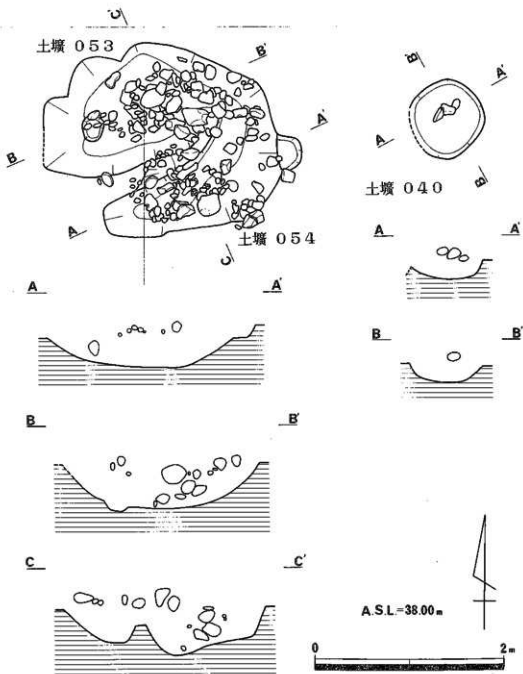
第8図 土坑052実測図



A.S.L. = 38.00 m



第9図 遺構実測図 (土壙001、006、010)



第10图 遺構実測図 (土壙040、053、054)

写 真 图 版



(A) 長者平遺跡全景 (南より)



(B) 長者平遺跡近景 (北より)



(A) 昭和62年度 南区発掘風景



(B) 昭和62年度 南区完掘写真



(A) 住居跡015柱穴の発掘風景



(B) 住居跡015完掘写真



(A) 住居跡015炉跡付近遺物出土状況



(B) 住居跡015炉跡の掘り方



(A) 住居跡012の炉付近



(B) 土壇010完掘写真



(A) 土壙005・007完掘写真（北より）



(B) 土壙008完掘写真



(A) 土壕001完掘写真 (北より)



(B) 土壕002完掘写真 (北より)



(A) 古墳の周溝007完掘写真（北より）



(B) 溝跡021完掘写真（東より）



(A) 昭和62年度 北区発掘風景



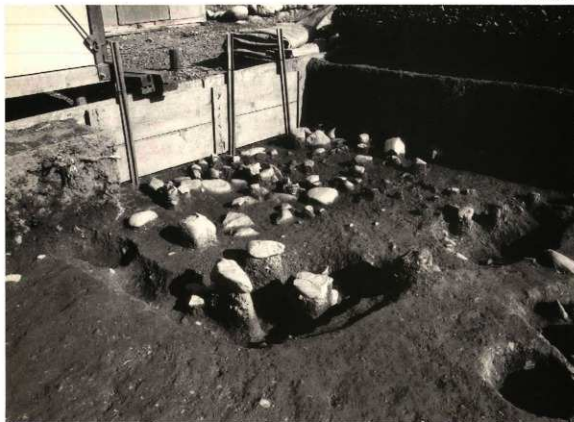
(B) 昭和62年度 北区完掘写真



(A) 土壙052完掘写真(北より)



(B) 土壙040他完掘写真(東より)



(A) 住居跡050床直遺物出土写真（南より）



(B) 古墳の周溝025完掘写真（北より）

昭和62年度国庫補助事業

発掘調査報告書

袋井市長者平遺跡

1988年3月30日

編集 静岡県袋井市教育委員会©

袋井市国本3070-1

TEL0538 (43) 2111

印刷 株式会社 開明堂

浜松市中沢町1番1号